日本人とS・スマイルズの『労働論』

藤原　　暹

はじめに

S．スマイルズの著作について，柳田泉氏は次のように述べている。

『自助論』の成功から，彼は伝記の外に，同種類の通俗倫理書を次々と出した。『人格論』(Character) 1872,『節倹論』(Thrift) 1875,『義務論』(Duty) 1880，がそれである。この四部は恐らく新訳聖書の四福音書に擬して書かれたものではなかろうかと思うが，少なくとも，スマイルズの四部の修養書として数十年間四福音書についで重視されたことは事実である。……尚これら四部の書は明治の後期に新訳されて歓迎を新にしたものである[1)]。

おそらく，柳田氏の指摘するように，『自助論』と並び『人格論』,『義務論』,『節倹論』の四書がいずれもキリスト教の「神」の摂理に基づく新しい産業社会人への福音書的役割を果たしたことは否めない事実であろう。

しかし，スマイルズ自身が「本書は自助論，品性論の続編にして……幾多の新しき例証を包含す」と述べ，更に「過度の頭脳的労働及び健康の要件の二章は……主として著者の経験を論拠とせり」[2)] と自負している『労働論』を無視していることは問題であるように思われる。しかも，この『労働論』は後に詳述するように『自助論』が説く自立の為の勤労 (Industry) を重視するというものではなくて，娯楽 (Recreation) を自立の根拠においているのである。

そこで，本稿においては，『労働論』の内容を『自助論』と対照しながら考察し，それが単なるスマイルズ個人の問題でなく，やがて生じてくる社会的弊害への警鐘であったことをみる。次にそのような『労働論』は如何に日本人に受け止められてきたのか（或いは，軽視されてきたのか）を考え，更にそのような状況は日本思想史上で如何なる問題をもっているのか，等について考察することにする。

I 『労働論』の内容

『労働論』の原著 LIFE & LABOUR[3] が出版されたのは1887年（明治20年）である。これはスマイルズ七十五歳の時である。1958年に出版された『自助論』からみると三十年近く経過している。日本でこれが翻訳出版されたのは明治40～44年にかけてである。竹村修によって初訳され，内外出版会から出された。なお，この竹村訳本の後に大正6年（1917）4月17日版発行という松本商会本が手元にあるが，これから推察するとかなり読まれたものと思われる。更に，原文の Extraction adapted to japanese student by T. Murayama というテキストが明治36年（1903）に立教学院から出版されていて，英語のテキストとしても読まれていたことが考えられる[4]。

この書は次の十章より成っている。

Chapter 1 The man gentleman. 2 Great man-Great workers. 3 Great young men. 4 Great old man. 5 Lineage of talent and genius. 6 The literary ailment. 7 Health-hobbies. 8 Town and country life. 9 Single and married-helps meet. 10 Evening of life-last thought of great men.

この中で，スマイルズ自身が特に「序文」で「過度の頭脳的労働及び健康の要件の二章」という部分は第六，第七の章に当る。また，『自助論』でもそうであるが，全体の論旨を予告しているのは第一章である。そこで第一，第六，第七の三章を中心に『労働論』の主張を辿ることにする。

第一章「人間と紳士」では，まず次のように「労働」が人生の最大の部分であると説くのである。

The life of man in this world is, for the most part, a life of work. In the case of ordinary men, work mey be regarded as their normal condition. Every man worth calling a man should be willing and able to work. The honest labouring man find work nesessary for his sustenance; but it is equally necessary for men of all condition, and in every relationship of life. How can one be idle when others are busy how maintain social respect, honour, and responsibility? Work is the best of all educaters; for it forces men into contact with other, and with things as they really are.

労働が人生の最大の意味を示すのはその労働によって,「人間」たる自覚が得られると共に，社会的尊敬をも受けるからであるという。

この考えは『自助論』における「勤労なくしては文明は一歩も進まざるなり」 By labour the earth has been subdued, and man redeemed from barbarism; nor has a single step in civilization been made without it. (the Gods, says poet, have placed Labour and toil on the way leading to the Elisian fields)[5] という考えを受け継ぐものである。

更に,「勤労はその最難なるものといえども，吾人に快楽を共し，また修養の材料を給す」 Work, even the hardest, is full of plaesure and materials for self-improvement.[6] という人格形成への起点と考えられていたことをも受け継いでいるのである。

ところが，かかる労働の福音を説いた後に，次の如く言う。

We have spoken of the gospel of work; let us speak of the gospel of leisure. "Without labour there is no leisure," has become a proverb yet one may labour too much, and become so habituated to work and to work only, as to be unable to enjoy leisure. Men cannot rise to the better attributes of their nature when their life is entirely filled with labour.

ここでは，余暇 (Leisure) の福音を説くのである。とかく労働過度をもって人生の目的とし，余暇を楽しむ意が無いのは人間本来の自然性を全う出来

ないことにもなるというのである。

Work is not quite a blessing when it degenerates into drugery ; for drudgery does not produce happiness or beauty of character. On the contrary, its tendency is narrow and degrade it. Work is not the be-all and the end-all of humanity.

と述べ，仕事は「人生の終局の目的」では無く，しかも「人生の最高の善」では無いと言いきる。

言うまでもなく，スマイルズはここで「労働」を否定しているのではない。彼の Leisure 観は「労働なくして余暇はない」という考えであって，そこから彼は Thus, everything has to be taken with moderation. Work is good and honorable, not so much as for itself a for higher object-for the cultivation of the mind, for the development of the higher power, and for the due enjoyment of the life. と言うのである。

適当な節度をもった人生の高尚な目的 (Higher object) に仕事を指し向ける必要を説くのである。

一つの仕事を成し生活するのさえも困難なのである。まして高尚な域を求めることは至難であるが，スマイルズはかかる困難を求めるのである。A great point is to vary occupation. We must do one thing well ; and for the rest take relaxation, and adopt variety of work. This is the true way to enjoy leisure and preserve the bloom and grace of life. Holidays can then be enjoyed ; exercise will be found for faculties of mind hidden away unused; and variety of work will recruit the springs of leisure and give to enjoyment, so as to render life a continuous holiday.

かくして,「仕事の趣味は以って快楽の源泉を補ふ」ような心境になりうるという。そうなれば「人生は休日の連続の如くなる」というのである。

このように彼の余暇観には「労働の中の楽しみ」を追求する。どこまでも労働に包摂される「楽」の経験が「教養」でもあったのである。しかし，この側面だけではなかった。

第七章「健康と娯楽」では，Recreation という語を更に用いて「娯楽」の福音を説くのである。

彼は，まず All vigorous nation are characterised by the vigour recreation と述べ，全ての国民の活力は娯楽 (recreation) にあるという。これは『自助論』で，

This vigorous growth of the nation has been mainly the result of the energy of individuals[7] と述べていることは対照的である。

しかも，この娯楽という概念は彼によって「労働の中に在るもの」ではなく，一応労働と対立するものと捉えられている。労働の中の楽しみということが多分に精神的なものを志向するのに対して，これは多分に肉体的なもの (Sleep, Health, etc) なのである。

Recreation is creation ; the word implies it. It is a second creation, when toil of body or brain has exhausted the animal or mental spirits. Sleep itself is a creation, and the sounder the sleep the more is the heath recuperated. But there is a recreation of another sort required for-workers, and that is active recreation.

というように，Recreation は「創造」なのである。もし体力や脳力が消耗した時，それは「第二の創造」となるのである。しかも，体力と脳力との消耗は異っていて，特に後者の回復には Active Recreation が必要であると考える。

このようにスマイルズが「創造のための娯楽」を考えるに至るにはその理由（個人的理由以外に）があった。

Overwork has unfortunatly become one of the vices of our ages, especialy in cities. In business, in learning, in low, in politics, literature, the pase is sometimes tremendous, and the tear and wear of life becomes excessive.

（産業革命以来の）当今の急速に変動する都市生活の中で「過労」が人命をも冒し出していることを見てとっているのである。ここに「健康」という肉体的自然の回復が注目されているのである。

かくして，彼は In order that the mind should act with vigour and alacrity when required, it is needfull that it should have frequent intervals of recreation and rest.と述べ，間隔的な肉体の休息による Mind 自体の活力の回復を提唱するのであった。(『自助論』の Mind は Industry を志向する Mind で当然の如く健康であり，活力に富むものであるとする。)

ここに，『労働論』には『自助論』を含む四部書とは異った倫理が提示されていたことが分るのである。

では，次にこのような『労働論』が日本人に如何に受け止められるのかを考えてみる。

II 『労働論』における Recreation（娯楽）の受容

前節で指摘したことであるが，『労働論』の一つのキーワードはRecreationという語であったと考えられる。そこでこの語をめぐって日本人が如何にその概念を受容するのかを調べてみたい。

明治41年から出版される竹村修訳本では，原文の Recreation is creation; the word implies it... 以下が次のように訳されている。

休養は創造なり。語義正に斯くの如し。体力又は脳力が労働に由りて消耗せる時，休養は第二の創造なり。睡眠そのものは一種の休養にして熟睡安眠する程健康は回復す。然れども脳力労働者に必要なる別種の休養あり。即ち勇壮活発なる休養是なり。総じて勇壮剛健なる国民の特色はその休養娯楽も亦勇壮剛健なるに在り[8)]。

原文の五個所の Recreation は四個所までが「休養」と訳されていて，一個所のみ「休養娯楽」と訳されている。これを当時の英和辞典で照合してみると次のようである。

年代	辞典名	訳語
明治6	柴田，子安 英和字彙	保養，欝散，嬉戯
明治20	島田 和訳英字彙	精神を保養する，保養，欝散する，嬉戯

年代	辞典名	訳語
明治20	棚橋 英和双解辞典	Relief after toil 保養，欝散，嬉戯
大正 2	新撰英和辞典	養気，保護，欝散，気晴し，慰み，気散じ，娯楽，休養
大正 4	井上 英和大辞典	気晴し，欝散，心気更新，休養，清遊，娯楽，慰安
大正 4	斉藤 英和中辞典	休養，楽しみ，慰み，娯楽，気晴し
昭和 2	岡倉 新英和大辞典	気晴し，休養，改造

ちなみに，和英辞典をみると，ヘボンの『和英語林集成』(慶応 3) では「Goraku」はなく,「Recreation」が「nagusame, asobi, kisanji, kibarasi」となっている。南条の『和訳辞典』(明治29) では「Goraku」が「pleasure, spacetime enjoyment, amusument」となっている。なお，面白いことには白井の Standard Dictionary of the English Language (明治32) では Recreation が Refreshment after toil となっている。

これらから推察すると，明治の終りから大正初年にかけて Recreation は「娯楽，休養」となってきたようであり，その限り竹村の訳は時代の新しい訳語概念を表しているようである。

こうした Recreation 受容史の中で起ってきたのが「民衆芸術論争」であった。

大正 5 (1916) に発表された本間久雄の「民衆芸術の意義及び価値」を発端として約30人の人々を巻込んだ論争であった[9]。

本間は今日民衆にとって必要なことは「更新」(recreation)[10] であると認識した。この認識は多分にエレン・ケイの『更新的修養論』という論説によっていたが，そこでは「平民」に属する人達がその生活の中に存在している自由時間をいたずらに消費していることに対してそれを「教養ある人間」に高める為の振替が必要であるとした。そしてその方法として民衆が高尚な芸術を自ら享受するように運動を起すことであるというのであった。

これはまた「高級芸術」(高級文化) の平準化，普及化という性格を示して

いた。この点で大杉栄の批判[11]が出てくるのである。大杉は Goverment by the people, for the people and of the people というように，Art by the people, for the people and of the people といわなければならないのであるとし，更に娯楽が「一日の労働に疲れた労働者のための肉体上及び精神上の休養」[12]でなければならないというのであった。

この大杉の見解は本間と対照的性格を示している。つまり，本間のそれがいわゆる精神的価値への志向と教化を第一義としているに対して，大杉の方は肉体即応の休養と回復を説き，そこに主体的に「精神的元気の源」とすべき娯楽でなければならぬ事を説くのであった。

ところで，スマイルズの考えはこの本間と大杉の考えを共に未分化的に内包していたように思える。いわば，二重の性格を有していたのである。

いずれにしても，大正期に入ってにわかに Recreation は日本人の間に急速に意識化されてきたのである。そして「娯楽」の学問的分析も起ったのであった。

それは，大正10～12年にかけて行われた大原社会問題研究所の一連の研究であった。一つは大林宗嗣著『民衆娯楽の実際的研究』（大正11年大原社会問題研究所出版部）であり，いま一つは権田保之助の指導による大阪市社会部調査課編纂『余暇生活の研究』（大正12年）である。

この二つはともに当時ようやく「世人の注目を浴びるようになった民衆娯楽問題」を反映した民衆娯楽の調査報告であった。しかし，より注目されるのは両者共に単なる調査でなくて，次のような「娯楽」に対する理論的考察をもっていた点である。

つまり，前者では「娯楽」の実際的分析に先立って，「第一章　娯楽の理論的研究」「第二章　娯楽の語義」があり，後者では「序説　第一章　余暇利用の意義及び価値」がある。

まずこの中で，大林の「娯楽の語義」をみると次のように述べている。

娯楽は英語の Recreation に当る言葉で，その語源を尋ねて見るとラテン語の Recreatio という名詞から来た，Recreatus という動詞で英語の to create anew 即ち再び改めて創造するという意義を持っている。然ら

ば改めて創造するという言葉の内容はどういうものかといえば，極めて広大なる意味を含有しているといってもよい[13]。

ここで，大林の捉えた概念はスマイルズの言っているところと合致しているのである。もっとも，大林によるとかかる娯楽についての研究参考書は少なく僅かにカークパトリック博士『社会学原論』があるに過ぎないとして

或一定の時間の間一種類の労働に従事している人は最も娯楽的変化（リクレーチブチェンジ）の必要を感ずるものである。これを補給するに遊戯は遙かに休息（レスト）よりも有効である。肉体的，精神的均衡を回復するために心身の他の活動が興奮されねばならぬ。もし特別の疲労と等く一般の疲労が継続的の活動によって発生したとすれば快楽と休息とはこれに対して更に娯楽的なるべく，もしも疲労が特別なものでなければ他の力を用いる行動が最も有益である[14]。

という引用をしている。これからみると，大林の概念は多分にカークパトリックに負うところがあるようである。いずれにしても，スマイルズの説くような「娯楽」が大正期において必須の問題として注目され出したことが分るのである。

さて，大林の「娯楽」の理論的考察は後者の「余暇利用の意義及び価値になると，次のように展開する。

第一，人生の意義の中心は生産創造の活動に存し消費享楽はむしろこの生産能力を維持し増加せんがための手段に過ぎぬと認めたものである。第二，第二の見解は前と全く相反し生産活動は収穫という結果を得るための手段に過ぎずその結果を消費することは生産の目的である。従って生産時間は余暇のための手段として存するに過ぎない[15]。

この二つの見解はまた前者が「手工業的企業組織の汎く行われていた時代」，後者が「資本主義的大企業組織の下にある現代都市における民衆」という社会の発展段階に於ける相違でもあると述べている。

しかも，この見解では「近時の傾向」として，「資本家と言える少数者の専制的支配の下に立ち賃金労働者として活動するに止るが故に生産活動そのものに対して興味を見出すこと難く．．．（かかる状況では）余暇時間が真に人

間としての生くべく与えられた時間である。」[16] というのであった。この考えはスマイルズのそれと大きく異なる極めて急進的なものであった。

III 日本におけるS.スマイルズ『労働論』受容の思想史的意味

以上の如く，竹村修による『労働論』の翻訳はようやく日本人が新しい産業社会の生活から直面してきた「労働」と「娯楽」の時代的思想を反映してなされた作業であった。しかし，スマイルズのこの作品は『自助論』ほどの名声を得ないまま今日まで殆んど忘れ去られてきた。(いや，同時代の「娯楽」認識史からも無視されているのである。)

これは一つには，日本人がスマイルズの思想に或る先入観(『自助論』のスマイルズという）を持って受け入れ，それを固持し続けたためであろう。

二つには，そのように日本人をして固持させるような歴史的社会的条件が日本の近，現代に存在してきた為ではなかろうか。

ここで今一度スマイルズの「労働」と「娯楽」の関係を振返ると，一つは Industry な Labour の中に Recreation は存在するということであり，二つ目には Industry とは分離した Mind の中にこそ Re-create の力が存在するというものであった。

日本人がスマイルズに捧げ続けてきたのはこの前者の思想であった。この先入観はスマイルズに接触する以前に予定されていたのではなかろうか。

「労働」の語概念を調べてみると，『自助論』を初邦訳した『西国立志編』では，

中村「身体ヲ労働スルノ益」[17] は From the numerous instances already cited of men of humble station who risen to distinction in science and literature, it will be obvious that labour is by no means imcompatible with the highest intellectual culture. Work in moderation is healthy as well as agreeable to the human constitution. Work educates the body, as study educated the mind ; and that is the best state of society in which there is some work for every man's work.[18]

である。

ここの部分の見出しは，The Use of Active Employment とか Importance of physical Health となっている。

なお，中村は同じ「労働」を次の項では「ウンドウ」と読み仮名を付けている。Labour は『英華字典』（ロプシャイド．井上）では「工，工作，労」であり，Work は「動，作，造」である。また，『英和対訳袖珍辞書』（文久2）では「仕事，業務」であり，Work は「仕事，業」である。

国語辞典では，明治31年の『ことばの泉』（落合直文）には「ろうどう」はない。明治37年，大正14年 543 版『言海』には「労働」がハタラキ，ホネオリとなっている。

「労働」も「娯楽」と同様にやはり明治の終りから大正にかけて一般化するようである。

しかし，「労働」という言葉自体は江戸時代からよく使われている。例えば，貝原益軒の『養生訓』では繰返して以下の如く使われている。

「朝夕歩行して身を労働して」，「手足を動かし，労働して血気をめぐらし」，「飲食，色欲，労働を過せば元気やぶれてへる」，「身を労働すべし」これらの用例を見ると，同じ『養生訓』で「身はこころのやっこ（奴）動かし労せしむべし」「身を休め怠りて動かさざるは養生に害あり」，「日日朝晩運動すれば」という意と同じである。つまり「労働」とは「身を動かし運動する」事であって，いわゆる「仕事をする」意味ではない[19]。

しかし，「四民ともに我が家事をよくつとめておこならず．．．わざ（業）をつとめて身を労働すべし」[20] という例をみると両者深い関係にあるようである。

こうした「運動」が「労働」の伝統的な意味であったのである。

中村が，Active Employment や Physical Health を「身体ヲ労働スル」と訳し「労働」に「ウンドウ」と読み仮名をつけたのもこの伝統的使用からであった。

ところで，この伝統的な「労働」や「運動」により「元気を養う」という概念は，「天の気」を保養することにあったのであり，更にその「気」は「天

理（太極）」と深く結びつく朱子学的なものであった[21]。「身を労すること」は天（超越者）の意志に沿う人間の行為であったのである。

つまり，「楽しみ」は「父母天地に．．．つくし．．．命ながくして．．．あに楽しまざるべけんや」[22]という天地の理に参賛する喜びを示すのであった。これはスマイルズの労働の中に楽しみがあり，それは「神」によって祝福されているのであるという一つの性格に通ずるものであった。中村によって，『自助論』が心酔されるのもここに一因があるであろうし，日本人が『自助論』的スマイルズ観を保持するのもこの根強い伝統意志によっていたと考えられるのである。

かかる伝統的「労働」意志の下では「労働」と対極にある「娯楽」という思想を受け付けるのは困難であったし，またそれを可能にする歴史的社会的条件も日本の資本主義の展開過程からは考えられないことであった。大正から昭和，更に15年戦争へと日本人の生活は破壊の方向をたどり，「娯楽（Recreation）」は「厚生」[23]と訳されて国家総動員の標語となっていったのである。

日本人が再び生活回復運動に着手した時に，『自助論』の重訳がなされ，その精神が再び強調されたのである。それが，永井潜の作業であったのである。

藤竹暁氏は「戦後における余暇思想の展開」[24]において，戦後の余暇思想を次のように三段階に分けている。

昭和20年代は「余暇志向の定着期」，30年代は「余暇欲求の開花期」，40年代以後は「余暇思想の展開期」であるとする。

この中で第一期は戦後の混乱で，「いわゆる余暇はなかった」という。第二期において戦前の生活水準に戻った時はじめて「余暇」への欲求が起ったのである。そして，三期にいままでの「成長追求型」から「成長活用型」になり，本格的な「余暇論議」が起ったのであるという。

明治6年に生まれ，『自助論（西国立志編）』に感化されて，その人生を拓いた星一が死亡したのは昭和26年であった。その父の人生観が『自助論』に啓発されたものであったことを息子の星新一が知ったのは昭和29年に現代語訳された永井潜の『自助論』であった[25]。

つまり，戦後の「余暇志向の定着期」において『自助論』は新しい機能を発揮していたのである。当然のごとく『労働論』にあるいま一つのスマイルズの思想などには気がつくはずはなかったのである。

『労働論』の意味が真に評価されて，そのことによってスマイルズ像の書き替えが可能になってきたのは正に現代社会においてであるといってもよいのである。

またここに，我々日本人に課せられた一つの課題をも知ることができるのではあるまいか。

注

1） 『冨山房　百科文庫18　西国立志編』　解説
2） 竹村　修『労働論』内外出版会　明治40～44　1頁
3） 本稿で使用する Life & Labour 初版本は大英博物館所蔵本を使用した。
4） これは国立国会図書館にある。
5） 本稿で使用する Self-Help は 1885 Z.P. Maruya & Company Tokyo のReprint 版である。p.49
6） 同　上
7） 同　上　p.48
8） 前掲　竹村訳　p.429
9） 藤竹暁氏「日本におけるレジャー論議の展開」『講座　日本の将来５』 潮出版社　1969　p.234～
10） 『近代文学評論体系５　大正期Ⅱ』　角川書店　昭和47　15頁
11） 「新しき世界の為の新しき芸術」　同上書　p.26～
12） 同　上　p.35
13） 大原社会問題研究所　同人社書店発売　大正11版　「第一編　諸論」　p.13
14） 同　上　p.5
15） 『生活古典業書８』　1981再版　「序説」　p.96
16） 同　上
17） 本稿で使用した『西国立志編』は明治21年出版銀花堂版である。その二百四十六頁に「身体ヲ労動（働）スルノ益」というのがある。また，二百四十七頁に「ジェレミー，チコル労動（ウンドウと読み仮名をつける）ノ益ヲ論ス」というのが出ている。
18） 前掲書　p.347～348
19） 使用した『養生訓』は杉靖三郎編　徳間書房版　昭和43年である。そのp.15

～p.55の「総論上，下」の部分に全て出てくる。

20） この思想は「総論」の根本思想であって一番最初に説かれている。

21） なお，貝原益軒も中村敬宇も共に日本の朱子学系の儒学者である。ただ，「理」よりも「気」を重視し経験的事実を求めた。

22） 前掲書　p.20

23） 石川弘義氏「余暇の理論史一その源流をさぐる」『人間とレジャー１』　日本経済新聞社　昭和48　p.94

24） 同上書　p.110～

25） 星新一「中村正直」『明治の人物誌』　新潮社　1978　p.10～

なお，同著者には『明治，父，アメリカ』（新潮社）という父の伝記をくわしく記述した作品もある。

（筆者　岩手大学人文社会科学部教授）